

三輪田米山の書——六十歳代作品からの考察——

The Calligraphy of Miwada Beizan : Some consideration on his works produced in his 60s and afterward

服部 一 啓

HATTORI Kazutaka

(美術教育講座)

(平成二十八年九月三十日受理)

はじめに

明治期に活躍し能書の名を博した人物たち。中林梧竹など書を生業とした書家、副島蒼海などに代表される文人、伊予の神官であった三輪田米山。没後百年を経て、漸くその書の解明がすすみ、大規模な没後展の開催などその真価が再認識されている。三輪田米山(一八二一—一九〇八年)の書の名声は、存命中から伊予一円に知られ、それは自社である日尾八幡神社の注連石「鳥舞魚躍」の揮毫(六十歳時)によるものが大きい。米山は六十歳を契機として揮毫依頼が飛躍的に増え、また彼の書も独自の書風へと確立していく。しかしながら先行研究では、六十歳代の書の詳細な検証が少なく、この時期における米山の制作観が詳らかになってはいない。筆者はこれまでに拙稿「米山の書の現代性」『三輪田米山特別展』図録、三輪田米山特別展実行委員会、二〇一四年)などにおいて米山の書美を論じてきた^(注1)。本研究ではこれまで

の調査研究を基として、「米山日記」^(注2)をはじめとする米山の生活記録、また先行研究^(注3)を精査して、六十歳代の米山の作品を考察していくものである。

一・書風の推移

まず米山書の書風推移を確認する。米山の書もまた、多くの作家同様に、生活史(環境・交友・学問・思想)と学書法(古典習得・師匠)の両面において必然的な変貌を繰り返している。そこには、晩年の書に至るほど彼独自の書風を明確に築き上げていった過程がうかがわれる^(注5)。

米山の六十歳までの概略をあげる。文政四(一八二一)年一月、伊予国松山藩領久米郡南久米村、日尾八幡神社の神官三輪田清敏の長男として生まれる。祖母里與は能書家として名をはせた僧明月の姪である。幼

名、通称は秀雄、字は子廉、室号を得正軒といい、米山と号した。常貞の名は、三十歳の時に国学者大國隆正^(注4)より賜っている。米山は父清敏の逝去に伴い二十八歳で神官を継ぎ、三十五歳にして叔父荻山光次の二女要と結婚し、四十一歳の時に長女鶴が誕生する。四十八歳で明治維新を迎え、六十歳で娘婿に家督を譲る。国学を中心に和漢の学問を修め、神官としての生涯を貫いた。神官の生活の傍ら、僅かな法帖を頼りに精習を繰り返し、和歌を詠み、芝居を好み、酒に浸る生活の中から彼独自の書を生み出した。

米山の書は四十歳を過ぎる頃から次第に、「幟」と「石文」によって書名が上がり揮毫依頼が多くなり、八十八歳にいたるまで夥しい数の作品を揮毫している。これら膨大な作品群の中から紀年作品や制作年代の明らかな作品を抽出、編年分類し、あわせて『日記』をはじめとする彼の生活記録を先行研究から精査、書風の推移を分析した結果、書風の来源と変遷はおおよそ次のとおりとなった^(注6)。

米山の書で現在最も初期とされるのは、米山二十八歳、嘉永元年の『日記』である。そこから三十八歳までを一区切りの第一期とする。まだその書から主張らしきものは見いだせない。

次の第二期、三十九歳から五十九歳までの壮年期は、王羲之・鍾繇に私淑し、その体と意を摂取すべく執拗に臨書、古典研究を繰り返した米山の書の開拓期といえる。三十九歳時の大護社手水鉢「奉献」、四十一歳「乃万安則碑」に古典研究の成果と米山書風の萌芽を看取できる。この時期は、古典多習時期と呼ぶにふさわしい。

次の第三期は六十歳〜七十歳代前期。この時期は王羲之・鍾繇に対する米山の古典観が定着し、積極的にその書風を取り入れながら、自己の個性を前面に打ち出し、次第に米山の書風として確立する米山の書の成

立期である。この頃を示す代表作は、「石文」に多い。生家日尾八幡神社注連石「鳥舞・魚躍」は六十歳。伊豫豆比古命神社注連石「龍游鳳舞」は六十二歳、溢れんばかりの生命力を宿し、重厚な線質の奥に盤石の骨格を備え、他を圧する迫力である。また臨書の名品「臨十七帖」(六十四歳)がある。

第四期は七〇歳代中・後期から八十七歳まで。米山独自の書風を顕著なものとした強烈な個性を存分に発揮した作品が多く見られる時期である。晩年に向かうほどその書からは技法や考案が抜け去り、書かれた文字の沈着の度合いが深まり、紙面余白の妙が生まれている。その一つの頂点を示す作品が三幅対の大作、七十七歳の「福・禄・寿」や、山本発次郎翁遺愛の「頤光山林」、「無為」である。

第五期は最晩年八十八歳の書。落款に「米山八十八歳書」と記している。これらの作品は筆技や形を超え、高い精神性をはらみ剛毅などとは無縁な、『独清』の境地に達している。この八十八歳の書は一連の漢字作品に看取できる魏晋の穏やかな格調の高さを示す米山究極の作と、今ひとつ、体力的な衰えによるものか、それまでの書に比しやや線に弱さを含むものとの二種類が混在しているように思われる。以上がこれまでに明らかにした米山の書の変遷である。

二、六十歳の作品からの検討

まず、明治十二年の八月に日尾八幡神社が県社格となる。そして六十歳時である明治十三年、米山自身が還暦を迎え、三月に娘鶴と養子春元が結婚し、十月に春元へ社務を譲る。このように生活史では大きな変革の年であった。次に「六十歳」にあたる紀年作品を抽出すると、

「有終身之樂無一日之憂」^{〔圖〕} 明治十三年四月十四日 米山書

「惟神者謂隨神道亦自有神道也」〔圖2〕明治十三年七月 米山書

「金聲而玉振」〔圖3〕明治十三年八月 米山書

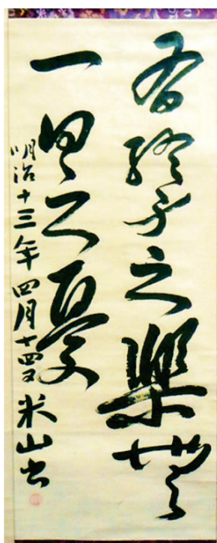
以上の三作品があげられる。「有終身之樂無一日之憂」は「樂」「憂」字を際立たせ線の暢びやかさが特徴的な書、「惟神者謂隨神道亦自有神道也」は語句内容からも矜持を正して筆を揮った作、「金聲而玉振」は酔裡の書であろうか大胆な書きぶりに目が奪われる。この時期の揮毫状況に関する興味深い記述が明治十三年の七月の『日記』（個人蔵 注2参照）から読み取れる。

七月廿五日 旧六月十九日 雨降。

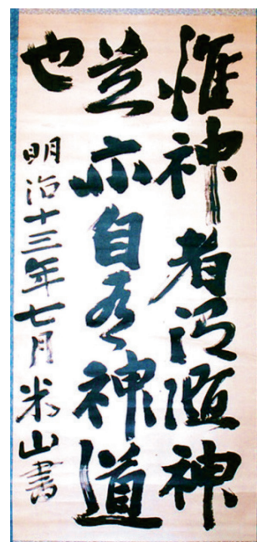
和市方みづから行て百四五十目の墨二十、唐紙凡百枚ほど。五尺位の大鯛二疋かひかへる。久米にて草書韻會、同淵海、万葉類葉集二冊、三藏院の筆陣（雋語）と大純羊毫一本、小筆一本とをとりかへり貫度と命ず。……そのひまに、予持参せし書家自在へ韻會、淵海のめづらしきかたを書き入る。ほどなくすれば万葉の歌、扇面また全唐紙へ認。また書家自在の語を全紙へ認。

廿六日 墨する頃かけ物かく。扇面、全紙、語また歌を認。

廿七日 朝、また認物少々致。



【図1】「有終身之樂
無一日之憂」



【図2】「惟神者謂隨神道
亦自有神道也」



【図3】「金聲而玉振」
『三輪田米山特別展』図録転載

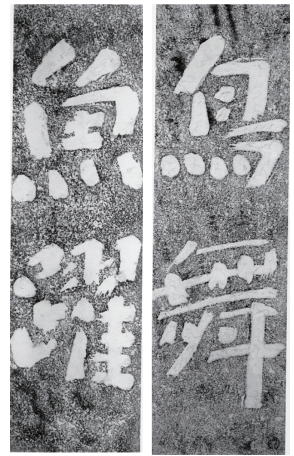
このように米山は揮毫にあたって墨場必携にあたる『書家自在』『筆陣雋語』を活用していた。また文中の韻會とは『草書韻會』（慶安四年・秋田屋平左衛門刊行）、淵海とは『草書淵海』（井出 臥溪編・延寶三年）を指す。両書籍いずれも草書を収めた字書で、米山はこれら字書から文字を引き出し、『書家自在』への書き込みを行っていたことも読み取ることができる。

次に生家日尾八幡神社の注連石と神名石への揮毫である。

・「鳥舞魚躍」〔圖4〕注連石建方 明治十三年十一月二十一日

・「縣社日尾八幡大神」神名石建方 明治十四年一月十五日

これまで大型の石文への揮毫は、氏子末社である龍神社鳥居「奉獻 久米郡中并當邨」（慶応三年・四十七歳）一基がある。ただし、文字幅は最大の「献」字で二十五cm程度、米山記号になる鳥居や注連石の中では小粒の部類である。



【図4】「鳥舞魚躍」拓本
「舞」四四×三五cm

そして神名石「縣社日尾八幡大神」の揮毫は、準備から書き上げるまで五日間（十二月一日～五日揮毫）を要し、都合よくできた旨の記述が日記に窺える。なるほど両者ともに構えを大きく一点一画ゆるぎない筆致で書かれ、堂々とした存在感を放つ。「鳥舞魚躍」「縣社日尾八幡大神」は自負するとおり会心の出来映えであった。しかし米山は、この石文建立後から自身が鬼籍に入るまでの二十八年間、常に目に留め様々な批正が脳裏に浮かんだに相違ない。例えば「舞」点画の太細とバランス、下部「艸」部分の造形処理にやや甘さがみえ、「躍」字は偏と旁の組み立て、点画の省略に成熟さが欠けているように思われる。二年後の六十二歳時、伊豫豆比古命神社注連石「龍游鳳舞」【図5】原本をみれば、書線が太く逞しく、自在な造形性を演出している。線の充実感、文字の力強さ、実画と余白の調和による緊張感、注連石縦長にあわせた構成など、「鳥舞魚躍」を凌いでいることがわかる。この伊豫豆比古命神社【注7】に米山筆の注連石が建立され、しかも出色の出来映えであったことが彼の書名を格段に高めたと思われる。そして、米山独特の書美の背景には、石文揮毫による遠方からの視座獲得が反映されたと考える。



【図5】「龍游鳳舞」原本
『墨美133号』転載

三、六十四歳～六十八歳時の作品からの検討

（一）「中講義」落款作品

米山の書作品には紀年を記したものが甚だ少ない【注8】。大抵の場合は「米山書」と簡潔にまとめている。その中であって落款に「中講義」「少教正」を記した作品が存在する。これらは教導職【注9】の職制官位を表したもので、六十四歳以後の作品を判別する重要な根拠となる。「中講義」落款（六十四歳～六十八歳）の作品は残存数が非常に少ない。一方、「少教正」落款の作品は、少教正に任命された六十八歳以後にかけて用いられ存外目にする機会がある。ここでは、これまでの研究では言及されていない「中講義」落款の作品に着眼する。

明治新政府は祭政一致の精神に基づき神祇官を復興し、神仏判然令を出す。さらに社格を制定し、神社を官社と府県郷村社に分けた。また政府は神社政策と同時に大教宣布を展開する。この役を担ったのが教導職である。しかしながら明治八年に神仏の合同布教の停止、明治十五年に神官と教導職が分離され、同十七年には神仏教導職を廃止した。神社行政は、明治初年以來神祇官、神祇省、教部省、内務省社寺局（明治十

年)、と改組を繰り返した。このように時勢と政治の動きによって伊予松山の日尾八幡神社と米山もまた大きく揺れ動いていたのである。日尾八幡神社はこのような状況下、明治元年、神仏判然により浄土寺と分離する。同五年、郷社に列し、同十二年に県社格となる。

つぎに五十〜六十歳代の神官・教導職としての米山の職制官位をあげる。

明治三年(五十歳)	少司教	松山藩より任命
明治四年(五十一歳)	日尾八幡社祠官	松山県より任命
明治六年(五十三歳)	訓導	教部省より任命
明治十二年(五十九歳)	少講義	内務省より任命
明治十七年(六十四歳)	中講義	神道管長より任命
明治二十一年(六十八歳)	少教正	神宮管長より任命

さて、「中講義」に就いた期間、厳密に言えば中講義の任命が明治十七年十月二十四日のことであるが、『日記』には十一月十三日に辞令書受け渡しの記述がある。また、小教正に任じられたのが明治二十一年二月九日で、『日記』には同月二十八日の記載となっている。つまり、中講義としての実働は約三年と三ヶ月程度であり、「中講義」落款の作品はこの限定的な期間に制作されたとみてよいだろう。

それでは「中講義」落款の作品をみていきたい。

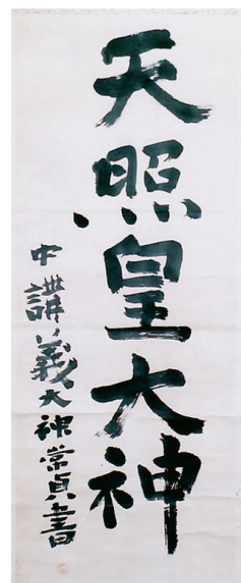
「天照皇大神 中講義大神常貞書」【図6】

「八百萬天津大神 千萬國津大神 中講義大神常貞書」【図7】

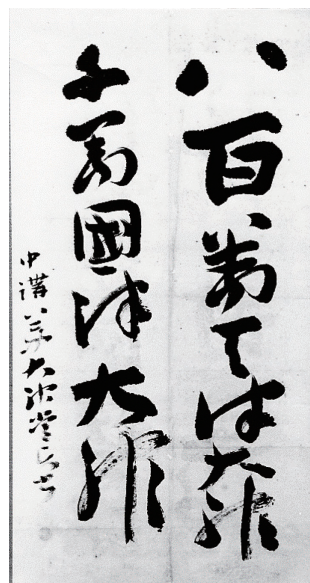
「日尾八幡大神 若宮神社 一宮神社 神道中講義大神常貞書」【図8】

ここに掲げた三点は神号、三社託宣の類である。神号は神祇の称号のこと、三社託宣は神・儒・仏の融合、思想として正直・清浄・慈悲観を表し、^(注10) 江戸末期には親しみやすい教義となり、米山も数多く揮毫

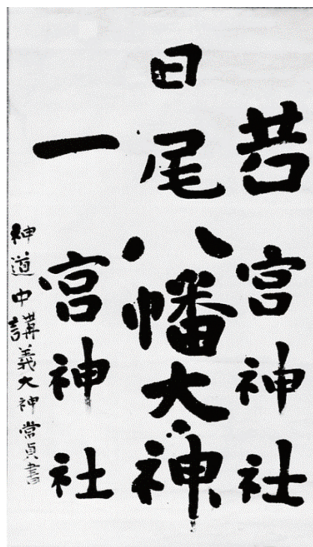
している。米山は神号・三社託宣にいたっては楷書、謹直な書風を以て示すものが多いが、非常に彼らしい個性を発揮した表現も存在する。



【図6】「天照皇大神」



【図7】「八百萬天津大神
千萬國津大神」



【図8】「日尾八幡大神
若宮神社 一宮神社」

「天照皇大神」については、制作日が明治十八年六月二十九日〜七月二日と断定でき、六十五歳の筆になる。「八百萬天津大神 千萬國津大神」は落款まで草書を基盤に統一される。「日尾八幡大神 若宮神社 一宮神社」では、楷書でやや真面目な文字の姿態をみせる。大ぶりの三

社に対して、落款は小ぶりで本文に沿わせ、下部に進むにつれ右傾する表情が印象的である。ほぼ同年代に制作されたこの「中講義」落款作品は、神号・三社託宣としては書きぶりの自在さが看取できる。しかしながら次に示す小屋峠総代方での作品や同時期に揮毫された石文と比べると、やや物足りない。

(二) 小屋峠総代方揮毫作品及び厳島神社注連石(明治十八年)

次に「明治十八年六月三十日」と款記のある額面「清而美」^{【図10】}とその一連の作品に着眼し、六十五歳時の米山の制作について検討する。併せて石文資料からは明治十八年十二月の揮毫になる厳島神社注連石「年豊人樂」をあげて考察を進める。

まず、『日記』(写本)によると、「清而美」^{【図9】}作品揮毫日より一ヵ月半程遡った五月十三日、小屋峠の総代(旧庄屋)が日尾八幡神社の米山のもとへ揮毫を依頼に訪ねる。この時には、米山が怪我をしており、身体に障る理由から禁酒中であつた。筆をとるには無酒では難しかったのであろう、この時は止むを得ず断り、体調が回復した折には揮毫する旨を約束したのである。六月二十九日降雨の中、福本弥一郎を供に連れ小屋峠総代方へ行くが、夜は洪雨となり認物(揮毫)としての滞泊となつた。(次の「」は日記より抜粋。~~~~~部分は著者による加筆。)

「同人俸は教師もいたし候位に付万事都合よし。一宮神社といふ額を認。外にも認物有之。」

翌三十日は、大風大雨となり、滞留を余儀なくされる。

「大風雨。川へ水出風はげしく滞留。認物致。」

さらに明けて七月一日、

「大風雨。認物致し當夜も滞留。」

「室屋へ人を遣して唐紙を求めに来る處、道にて兩三度転びしといふ事なり。」

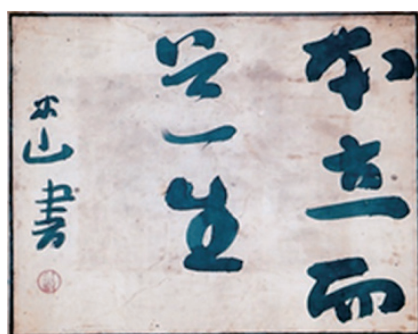
との記載がみえ、小屋峠への降雨による影響が甚大である様が綴られている。同時に大雨の中、制作も愈々佳境に入っている様子が窺え、荒れた天候にも関わらず市中へ紙を求めに遣わしている。そして七月二日は仮名の手本を書き、総代息子や子ども達に喜ばれたこと、そして家中若い者に久米迄送ってもらった旨の記載で締め括られている。

同家に伝わる作品は、「清而美」^{【図10】}「本立而道生」^{【図10】}「嘉趣」^{【図11】}「三社託宣」^{【図12】}前節の「天照皇大神」^{【図6】}ほか一行書作品や二行書作品、仮名作品など大切に所蔵されている。「嘉趣」は線の動きに目が奪われる。一見奔放にみえる筆あととは、両字の行草書体の持つ造形の特徴を捉え一気呵成に創出されたもので、米山の構成力の確かさを見ることができる。一方、「本立而道生」は、『論語』学而篇にみる、何事も根本が大切で定まれば自から進むべき道が開けるとの教えを書いたもの。奇を衒うことなく豊かな筆致であり余白が冴えている。六月二十九日の記述「一宮神社」は日尾八幡神社の末社一ノ宮神社を指し、当時は旧名を称えて河内神社と呼び、明治十四年に官許を得て一ノ宮神社と改称した^{【注11】}。諸般を推し測ると、小屋峠総代と米山の真意はこの【図12】「三社託宣」【図13】「一宮神社」などの神号揮毫にあったのではあるまいか。

また前掲の【図6】「天照皇大神」は「中講義」落款を有し、この滞在中に相当することから六十五歳筆と推察できる。



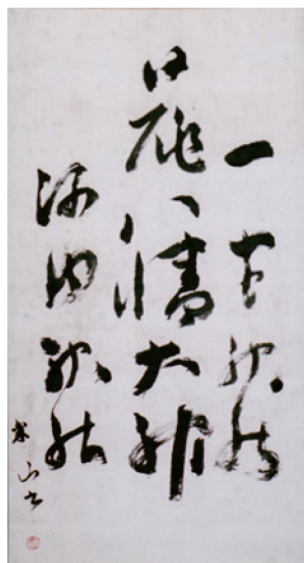
【図9】「清而美」



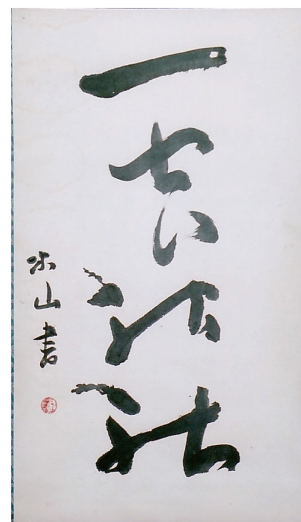
【図10】「本立而道生」



【図11】「嘉趣」



【図12】「三社託宣」



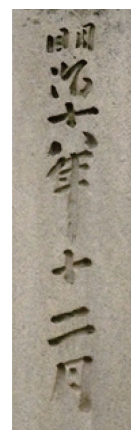
【図13】「一宮神社」

この小屋峠総代方での都合四日間の逗留は、得意の状態で惜しみなく筆を揮ったことは想像に難くない。このように同時期に制作されて作品ごとに一面貌をみせるのは、米山の力量の産物である。また作品個々の異なる風貌は、各年代の代表作を一瞥するのとは違った面白さがある。これらの作品は、六十五歳当時の米山書の表現域を雄弁に物語っている。

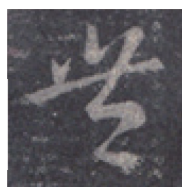
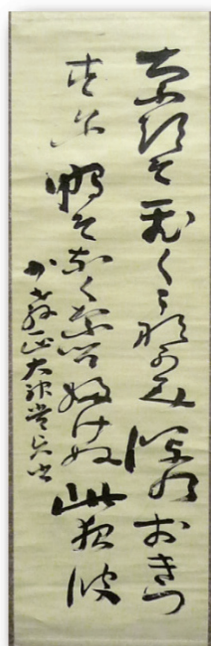
明治十八年十二月の厳島神社注連石「年豊人樂」【図14】は米山石文中最大級の大きさを誇る注連石である。『日記』には、十二月五日に漸く人力車が迎えに來たこと、注連石建立の実地を確認して六日に揮毫を行ない、七日に日尾八幡神社に戻る様が記載される。威風堂々とした肉太な行草書で、「豊」字からは王羲之「清晏帖」【図15】の筆意が顕在する。文字の迫力は鮮烈で見るものを圧倒する。対して裏面に刻された「明治十八年十二月・大日本帝國」【図16】は点画の自由さが目をひき、線質は穏やかで魏晉の風韻をもつ。石表・裏ともに楷書に近い書きぶりの行書と、行草書とが混合して字姿に大小があり、字間にも粗密の変化を有しつつ全体として格調の高い統一感をもつ。前述の「清而美」「本立而道生」などにも共通する特徴である。神社の神域に見事に米山の文字が躍動している。



【図 14】 厳島神社注連石

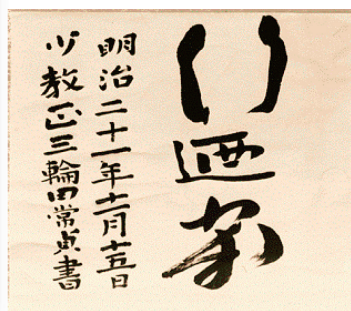


【図 16】

裏面「明治十八年十二月」
「大日本帝國」【図 15】 豊
「清晏帖」より

【図 18】 「和歌」

本歌 万葉集卷第十四、三三四八



【図 17】 「行廻家」

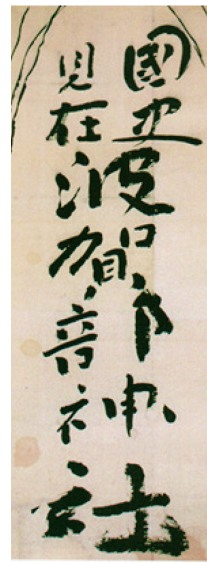
少教正米山書
少教正常貞書
少教正大神常貞書
少教正大神常貞謹書
少教正三輪田常貞書
少教正三輪田常貞書
少教正大神朝臣常貞書

名作品【図18】にも看取できる。管見の「少教正」落款の用例を掲げておく。

(三)「少教正」(六十八歳以後) 落款作品

惟神に篤い米山ゆえ、少教正の拝命は誇りであったに違いない。これまでの調査で確認できた「少教正」落款として最も早い作品は六十八歳の筆になる掛幅「行廻家」【図17】である。縦に三文字、「行」字は草書で懷大きく、「廻」字は筆圧を軽く極端な扁平に作り、「家」字は動性をもたせる。三文字で絶妙な間を表出している。款記は「明治二十一年十一月十五日 少教正三輪田常貞書」と丹念な楷書を二行でまとめる。本紙は縦54cm×横61・5cmの作品ながら本文と款記文字の対比によってより大きさを感じさせるとともに魏晋の格調をも感じさせる。以後、「少教正」落款は使用され、それは神号、三社託宣にとどまらず漢字作品や仮名作品【図18】にも看取できる。管見の「少教正」落款の用例を掲げておく。

さて、米山は「行廻家」揮毫の前後に波賀部神社神名石の揮毫に都合八日間にわたり取り組んだ。この石文揮毫にいたっては熟慮を重ねている。最初の揮毫に際しては、明治二十一年十一月七日から十一日までの五日間、波賀部神社祠官である武智勝宅に滞留し、直接自然石の青石に書丹した記録が残っている。



【図19】草稿「波賀部神社」

しかし納得がいかなかったとみえ、再度二十二日に武智宅を訪れ二十四日までの三日間滞在している。『日記』には

同二十二日「高井村大塚へ行。波賀部神社神名石ヲ認直す。」

二十三日、「同人方認有之滞留。」

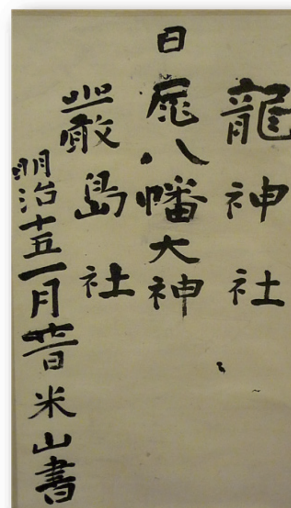
二十四日、「カヘリ又大塚神名石ヲ認直シ」

とみえ、草稿「波賀部神社」【図19】は繰り返し揮毫を試みた中の一枚である。つまり米山の石文揮毫は構想に充分時間を費やし、草稿を重ねながら揮毫した様子がうかがえ、彼の石文揮毫への姿勢が並々ならぬものであったことが推し図れる。

続いて「日尾八幡大神」と記した神号、三社託宣を揮毫年代順【図

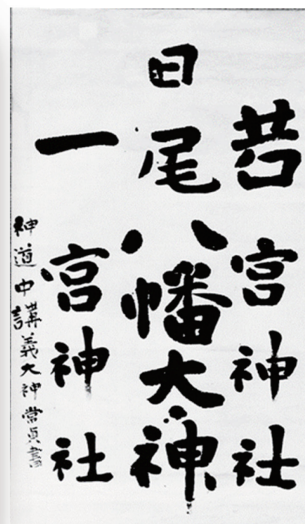
20】【図21】【図22】にみる中で六十八歳以後の特徴を導き出したい。三

点を比べていくと、年を経るほどに字幅の広狭や字間と余白の粗密がより明快にうつる。また「幡」「神」の偏旁の組み立ての工夫、「尾」「二画目」と三画目の不即処理による明るさ、三画目左払いの短縮処理による余白の広がり、「八」一画目左払いを点にするなど、文字と余白との関係が充実した様が看取できる。このようにわずかながら年齢とともに推移する書風を辿ることができた。



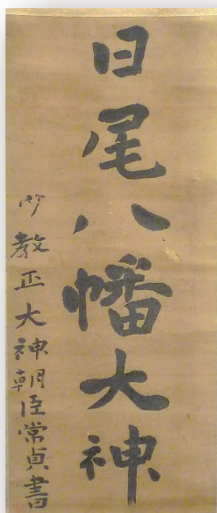
【図20】

三社託宣 六十二歳



【図21】

三社託宣 六十四歳
六十八歳



【図22】

神号 六十八歳

米山の書に関する識見は『日記』に間々みられるものの、同時代に活躍した中林梧竹の『梧竹堂書話』に相当すべき総括的な書道観はうかがう術もない。米山の学書の特徴は、ただひたすらに王羲之を追求したことである。その書は楷・行・草書に加え仮名に展開をみせる。米山の書は氣力が充実し、雄大豪壮と高く評価される反面、酔裡の書、特異な書などとも評される。確かに作品揮毫によつては『日記』の記述のように酒中に依つたところも事実ではある。またその書風があまりにも破格で規範性に乏しいと見做されることもある。それらが独自の書美を有しながらも、いわゆる逸格の書、破格の書といわれるゆえんの一つであろう。

まとめ

彼の書の特徴である石文は、六十歳を契機として自社の石文から評判を呼び、松山近郊の神社の注連石、神名石などに六十歳代で二十三基も揮毫している。神官としての側面だけではなく世間に認められ、氣力、体力、精神、学問や書が充実していた。そして、誰よりも石文の美について自覚していた。神域に鎮座する石文一つ一つ、建立地や原石を見定め着想を得た渾身の作であつたに相違ない。自身会心の水準に達したものが米山の石文といえる。

またこのことが彼独自の書表現、大字少字数書における優れた文字造形を生み出した要因でもある。すなわち、文字の構造をより堅固にし、豊潤で均衡のとれた書美、遠景からの視座獲得による文字造形である。米山の強烈な個性が鮮明に打ち出され、彼の書を代表するに相応しい作品が石文によつて生み出されている。

米山の書全体を俯瞰するならば先にふれたように、七十歳代中・後期

以降が最高潮といえ、作品は六十歳代より多彩な面目を呈している。一方で、これまで考察してきたように、六十歳代が米山の書美形成の上で重要な役割を果たしている。これまで考察されてこなかった六十歳代を示す「中講義」落款の作品、六十八歳以後を示す「少教正」落款作品を検証することとさらにこの時期の作品理解が深まった。

米山の書は独学であり、書の伝統に則り王羲之を中心とする魏晋の風韻を尊び、多習によつて鍊筆を獲得した。作品揮毫では、丹念な用意と探索のもとに書いた所産というべき作が、とくに石文揮毫、六十五歳時の厳島神社注連石「年豊人樂」、六十八歳時の波賀部神社神名石「波賀部神社」から認められた。六十五歳時の小屋峠総代方での揮毫作品からは、作品の質や趣が一作ごとに変貌することも彼の書の特徴であることが判明した。さらに、米山は臨書表現に独自性を有する(注12)(注13)。六十四歳作「臨十七帖」(注14)(注15)のように、彼は臨書それ自体の行為に自らの創造性を含んでいた。いいかえれば、自己表現として臨書作品を創り出したことが他の書人達との根本的な差である。そうした姿勢と石文によつて創造された世界が現代書の先駆ともいうべき獨創性をもつ作品を生み出した。これらのことが彼の書の六十歳代以後の大きな特質である。

〔注〕

(1) 二〇一五年には、「現代書の先駆「米山と梧竹」——臨書表現の独自性——」(『とてつもない書——米山の大字』所収、徳島県立文学書道館、二三―三三頁。)を発表した。

(2) 以後、米山日記のことを『日記』と記す。

『日記』は「諸用日記」(嘉永元年八月二十六日～明治四年十月

十八日)「三輪田祠官家日記」(明治四年十二月十二日～明治十三年十月二十四日)「三輪田春元日記」(明治十三年十月二十四日～明治三十四年十二月三十一日)の三種類に分類される。それ以後は歌日記風の書き様である。『日記』の総数は原本・写本を含め約三百冊に及び、大半は愛媛大学図書館(二〇二冊)に收藏される。本稿への引用は愛媛大学図書館ホームページで公開される「米山日記」の原本及び写本(伊予史談会)を確認し調整した。また〈個人蔵〉である「三輪田祠官家日記」【明治十三年五月十六日～八月八日】から一部引用の恩恵に与った。翻字については、浅海蘇山・浅海泰之・宇都宮泰山各氏の資料に拠ったことを付記する。

- (3) 拙編『研究文献資料』『米山の魅惑』所収、清流出版、二〇〇八年、一一四～一一八頁。これら文献を先行研究とする。
- (4) 大國隆正(一七九二～一八七二)は幕末明治の国学者。平田篤胤門。幕末維新の思想界に足跡を残し、明治新政府中で復古的役割を果たした。
- (5) 拙稿「三輪田米山―書美の変遷と特質―」前掲『米山の魅惑』所収、五九～六四頁。
- (6) 拙稿「三輪田米山の書美(一)」「(四)」(『書叢』第7号～第10号所収、新潟大学書道研究会、一九九三年～一九九六年)、及び「三輪田米山―書美の変遷と特質―」(『米山の魅惑』所収、清流出版、二〇〇八年、五九～六四頁。)において詳述した。
- (7) 祭神は伊豫豆比古命・伊豫豆比売命・伊与主命・愛比売命。御鎮座二千三百年の歴史を有し、縁起開運の神として崇敬される。とくに椿まつりは「伊予路に春を呼ぶまつり」と四国一の参拝者数を誇る。

を誇る。

- (8) ・浅海蘇山「書風」、前掲『米山 人と書』所収、二七〇～二九二頁。
- ・鴻池楽斎「落款の変遷」、前掲『三輪田米山名作展』所収、一〇一～一〇三頁。
- ・宇都宮泰山「米山落款書法例」『生誕一九〇年三輪田米山展』所収、三輪田米山展実行委員会、二〇一〇年、四二～四四頁。
- ・高澤浩一「米山の大字書」中の「大字書に見る落款の特色」、前掲『とてつもない書―米山の大字』所収、三～六頁。
- (9) 教導職の職制官位ほかは、『神道大辭典』第一巻～第三巻(平凡社、一九三七～一九四〇)を参照した。
- (10) 『神道辞典』一般項目(堀書店、一九六八年)、三四七頁。
- (11) 『日尾八幡神社縁起』所収、日尾八幡神社社務所、非売品、一九六〇年、一一頁。
- (12) これまでの調査では「臨秋菽帖」一幅と「臨十七帖」折帖二冊、そして「臨蘭亭序」五巻を実見した。他に別種の「臨蘭亭序」が浅海蘇山『米山―人と書―』(前掲、二三七頁)に所収されている。
- (13) 拙稿「米山の書の現代性」『三輪田米山特別展』図録 所収、二〇一四年、一〇〇～一〇五頁。「書の来現」の項に米山の王羲之受容(「臨蘭亭序」含む)を述べた。
- (14) 「三輪田米山名作展」(愛媛県立美術館、一九九〇年)などにおいて実見。
- (15) 森田子龍は『米山臨十七帖』冒頭に「即かず離れず、自らを生かしつつ十七帖をも生かさしめている。・中略・米山の臨書に

ふれることの意義は決して小さいものではないと信じます」(『墨美』一九三三、墨美社、一九六九年)と自信をもって特集を組み書評を述べる。

なお「米山臨十七帖」については菊川國夫氏に「米山と古典」中の「三、米山臨十七帖の反響」「四、米山臨十七帖をめぐって」(前掲『米山の魅惑』所収、四五～四九頁。)があり、また拙稿「三輪田米山の鍾繇・王羲之観」中の「三、臨書における鍾繇・王羲之観」(『書之美』五十一号所収、書之美研究会、一九九二年、一三～一六頁。)に詳述した。

【参考文献】

- ・『米山―人と書―』浅海蘇山(一九六九年)
- ・『三輪田米山名作展』愛媛県美術館(一九九〇年)
- ・『三輪田米山遊』横田無縫共著(一九九四年)
- ・『三輪田米山の書近代という憂いのかたち』成田山書道美術館監修(二〇〇四年)
- ・『山本發次郎コレクション』河崎晃一監修(二〇〇六年)
- ・『米山の魅惑』米山顕彰会監修(二〇〇八年)
- ・『生誕一九〇年三輪田米山展』三輪田米山展実行委員会(二〇一〇年)
- ・『三輪田米山特別展』三輪田米山特別展実行委員会(二〇一四年)
- ・『とてつもない書―米山の大字』徳島県立文学書道館(二〇一五年)
- ・『新編 梧竹堂書話』日野俊顕(木耳社、二〇〇一年)
- ・『梧竹堂書話』の研究』内村嘉秀(木耳社、二〇一三年)

【協力】

愛媛大学図書館 久万高原町立久万美術館
日尾八幡神社 伊豫豆比古命神社 米山顕彰会 泰心会出版

※本稿作成にあたり、関係各位から賜ったご厚誼に謝意を申し上げます。

また、調査等について所蔵者のご高配をいただきました。